

第14回 北海道小・中・高生短歌コンテスト 【講評】

北海道歌人會會長 内田 弘

今年度は、昨年度より一、三二七名多い六、一三二名の応募があった。応募学校数は一二三校あり、特別支援学校六校、学習塾からの応募もあった。第一次審査通過は四〇七名、第二次審査に残ったのは二五一名、その内、入選は八十四名だった。入選以上の作品は、難関を突破した優秀作品であり、応募する皆さんの参考になる作品の良い例である。入選された皆さん、入賞おめでとう！

作品は、学校生活での喜びや苦しみをうたったものが多いが、素直な気持ちを表現した短歌が良い短歌になった。また、短歌のリズムの持つ心地よさや、楽しさを感じた人も多くいたのではないかと思う。

短歌は、飾らずに素直に表現することをこころがけてもらいたい。実感のこもった歌を素直なきもちでうたうと、良い歌になる。そして、表現の面白さを工夫し、自分にしか出来ない表し方をすると、さらに良い歌になる。自分らしさで短歌に挑戦してほしい。

特別賞の三名の皆さんの歌は、独自の見かたや感じかたが、きわ立っていて、素晴らしかった。優秀賞・佳作・入選の作品も、皆さんの生活を、個性豊かにうたった作品が多かった。毎年応募する皆さんが増え、短歌の水準が上がっていることも頼もしい。

※掲載は学校名の五十音順。同学校内では学年順、同学年内では氏名の五十音順。
※各作品の講評は、P7～P13 内田弘、P14～P20 大塚亜希、P21～P30 阿知良光治

《北海道教育委員会教育長賞》

絵にかいたろうそく八本たん生日色ないひなん所えがおでそまる

厚真町立厚真中央小学校 3年 大宮 暉子

【講評】厚真町をおそった大地震は、人命をうばい、土砂くずれや停電と想像もできないことをおこした。作者は、誕生日をひなん所で、絵にかいたろうそくで、笑顔で祝ったが、両親や周りの人のあたたかいきもちがあったからだ。

《北海道歌人会賞》

パーカーのチャックからまる赤い糸まだ断ち切れぬ君への想い

函館市立北中学校 2年 佐藤 志龍

【講評】からまる赤い糸に君へのおもいをうたった、なかなか巧みな歌だ。赤い糸に君への断ち切れないきもちをからませ、しのびないところをこめた切ない恋の歌だ。「パーカーのチャック」が「からまる」と、たとえたのが特に優れている。

《北海道新聞社賞》

9くろ6の日は絶対わすれないまっくらで心に残った思い出の夜

士幌町立佐倉小学校 6年 仁和 璃音

【講評】9月6日は北海道で起こった地震、大停電、土砂くずれ、人命もうばった災害の日だ。「絶対に忘れない」と、うたう。実際の災害の日をちを入れてうたったのは手柄だ。「まっくらで心に残った思い出の夜」の最後の句が特に良い。

《優秀賞》

小学一〜三年生の部

かわいいねぷつくりふくらむシマエナガぼたん雪ふるあかんの森で

釧路市立鳥取西小学校 3年 山根 悠聖

【講評】雪の妖精と呼ばれる鳥「シマエナガ」を見てうたった。実際にぼたん雪のふる阿寒の森へ行つて、きもちをこめてうたった。シマエナガのかわいさを「ぷつくりふくらむ」という表現でうたって特長のある歌になった。

むかわちようアンモナイトをほりましたとんかちにぎってこんこんこん

札幌市立伏古小学校 2年 吉原 悠吾

【講評】鵜川町の恐竜は「むかわ竜」として有名になったが、アンモナイトを掘ったら、「とんかち」にこんと当たった。実際に掘って骨にあたったワクワク感を「こんこんこん」という音に表現してうたったのが特に良かった。

小学四〜六年生の部

教室の古い黒板なでてみるきず見てうかぶいろんな歴史

札幌市立前田小学校 6年 青山 優紀

【講評】使わなくなった教室のすみの古い黒板には、きずがいつぱいついていて。そのきずをなでてみると、「いろんな歴史」が浮かんでくる。その中には自分はもちろん、この教室で学んだ人たちの歴史がうかぶ、と表現したのが良い。

天見上げひまわりたちがさきほこる負けじと野菜実をつけている

札幌市立山の手南小学校 5年 中島 瑞喜

【講評】空を見上げると「ひまわり」が咲きほこっている。周りの畑を見ると「ひまわり」に負けまいとして野菜たちが実を付け始めた。ひまわりと対比して周りの畑の野菜たちに目を向けたのは面白い発想で、独特の歌になった。

傘をさし二人ではいり左かたぬれるあなたの小さな優しさ

苫小牧市立青翔中学校 2年 池尻 朱空

【講評】純情で微笑ましい歌だ。さした傘に二人ではいると、あなたの左肩が傘から外れてぬれている。私に気をつかってそうしてくれる、その小さな優しさが嬉しいのだ。あなたのこころに感動して一気に歌にまとめたところが良い。

北国の短い夏よ寂しげに瓶に残ったいちごシロップ

立命館慶祥中学校 3年 川合 咲葉

【講評】短い夏が終わろうとしている。瓶には夏の間にかんに食べたかき氷の「いちごシロップ」がまだ残っている。過ぎ去ろうとしている北国の短い夏が、よみがえってきて、寂しいきもちになる。「寂しげに」としたところが優れている。

夏祭りゆかた姿の君とゆくはぐれぬように小指をつないで

帯広北高等学校 2年 井村 愛美

【講評】夏祭りにゆかた姿の君と出かけた。本当は、君とはぐれることなどないのだが、それを理由にして小指をつないだ。浮き浮きするような少しはずかしいような、誰にでも一度は経験したことがあるような、いじらしい青春の歌である。

恋してる体感温度が5割増し手から伝わる君の鼓動

北海道小樽未来創造高等学校 2年 増井 愛生

【講評】恋をしているから、「体感温度が5割増し」というのが、独特な表現になっていて良い。「君の鼓動」も手から伝わってくる。手をにぎっている作者のドキドキするようなきもちを、素直な感動として表現した恋の歌である。

《佳作》

小学一〜三年生の部

たまにしかあうことできないあまいもももつとたべたいピンクのおしり

札幌市立福移小学校 2年 戸ノ崎圭剛

【講評】おいしい桃を食べたあとにつくった短歌だろう。「もつとたべたい」ということばに実感がある。めつたに食べられない桃への愛着を素直な表現でうたっている楽しく朗らかな一首。特に結句の表現に工夫があつてとてもよい。

早おきだ6時の前に目がさめたこっそりしたいパソコンゲーム

札幌市立伏古北小学校 3年 橋本 克彦

【講評】おそらく、普段起こしてくれる親よりも早く目覚めてしまったのだろう。そんなときにまずしたいと思うところがパソコンゲームだという点がとても現代的で、その正直な気持ちをもつすぐに短歌にしているところがよかった。

とうほくのねぶたまつりのかけごえはらっせえらあとにぎやかだった

札幌市立元町小学校 1年 尾高 杏衣

【講評】実体験の感動を具体的な地名と祭りの名前を出すことでしつかりとリアルにうたっている。「らっせえらあ」という、かけ声を明確にイメージさせる表現力により、にぎやかでいきいきとした祭りの光景が伝わってくる一首。

噴水のしづきをあびて本を読むずんだわたしとふやけたページ

富良野市立布部小学校 3年 サイペンディ

【講評】「わたし」と本の「ページ」との対比がうまい。私にとつては心地よい噴水だけれども、本はふやけてしまう。体験に基づいたさわやかな歌いぶりで、本がふやけるのに気づかないほど夢中になって読書していたこともわかる。

春にさく百年ざくら花がちる百年まちの春にさいている

岩見沢市立第一小学校 4年 木村 結衣

【講評】「春」「百年」「さく」という言葉が二回ずつ使われていて、リフレインが楽しい短歌である。百年間、まちにくりかえし咲くざくら、とも、百年目の今年を待っていたさくらとも読むことができ、読者にとっても楽しい一首。

ねむくてもつかれていてもはつとする二十万発勝毎花火

札幌市立駒岡小学校 6年 中野 愛華

【講評】つかれてねむたい時に目のさめるような二十万発の花火。花火がはじまるまでは、早く横になりたいと思っていたのだろう。その気持ちを吹き飛ばすような迫力が、作者の感動の表現によつてよく伝わってくる一首である。

丸いエサいつもの仲間敵になるチャポンチャポンと鯉の争い

札幌市立札幌苗北小学校 6年 加藤 隼斗

【講評】結句の「鯉の争い」まで読むと、そこにいたるまでの謎が解けるといふ構成がうまい。ふだん仲良く泳いでいる鯉も、エサをまくととりあつて「チャポンチャポン」と争う。音の表現が楽しく、生命力にあふれた歌である。

朝つゆに光かがやくくものいとしくしたたる十文字

苫小牧市立泉野小学校 4年 近藤 芦羽

【講評】おそらく、主がおらず破れて十文字になってしまっているくもの巢なのだろう。そこに朝つゆがしたたっているさまをうつくしく表現できている。よく晴れた朝の、きらきらとした陽ざしが見えてくるような短歌である。

ばあちゃんが昨年植えた柿の木のまだ小さな芽をずっと見ている

旭川市立緑が丘中学校 2年 上原 理

【講評】柿の木は成長の遅い木で、とくに北海道では育てるのがむずかしい。「ばあちゃん」と柿の木の「小さな芽」への愛情ややさしさを、大きく育ってほしいという思いが「ずっと見ている」ということばからよく伝わってくる。

放課後に好きなあの子に告白を恋のはじまり校舎裏から

釧路町立別保中学校 2年 近藤 伶哉

【講評】「放課後」の「校舎裏」という具体的な時間と場所を示すことでリアリティのある恋模様を描いている。告白の結果は喜ばしいものだったのだろう。初々しい恋の始まりに、楽し気な学校生活の雰囲気を感じられる。

晴れの日に遠き父の背追いかけてペダル踏み込む秋染まる道

名寄市立名寄東中学校 2年 小川 暁士

【講評】父親との物理的距離・精神的距離をとでもよく描けている。まるで大人が回想してうたったかのような成熟したうたいぶりで、表現の過不足もなく、こうした光景をこの年代でつかまえることができただことは高く評価できる。

蝦夷梅雨にけふる川岸見上げてる上がらぬ花火を浴衣の君と

北海道教育大学附属旭川中学校 2年 上野 未悠

【講評】上がる花火を見上げるのは当たり前だが、上がらない花火を見上げているところに詩がある。「浴衣の君」と作者との関係をあえて言わず、一緒に川岸で見上げるといふ動作から読み取らせるところも、とても面白い。

初めての選挙に行つてよみがえる小学校での日々の思い出

北海道旭川工業高等学校 3年 藤岡 亮輔

【講評】やや散文的ではあるが、子どもの世界である小学校に大人の権利である選挙の世界が混ざりこんでいるという違和感と、成人ではないがもう子どもでもないという、はざまにいる自分の複雑な気持ちをよく表現できている。

君残し急行で帰る帰り道心は残り各駅停車に

北海道石狩南高等学校 3年 古田菜々美

【講評】心を各駅停車の電車に例えたところにおもしろみがある。体は急行に乗ってどんどん進んでいくが、心は各駅停車のようにゆっくりとためらいがちに進む。そのちぐはぐさを示したことで、君への想いをうまくまとめている。

大好きなあなたと一緒に買い物空の財布と満たされた心

北海道小樽未来創造高等学校 1年 宗山 和可

【講評】財布の中身と引き換えに得たものは、「満たされた心」と「あなた」と過ごした時間。財布は空になるがそんなことは問題ではないという、ストレートな気持ちと対句を用いたユーモアによって、楽しい一首になっている。

ベビーカー押してほほえむ祖母の写真手を取り今は車イスを押す

北海道小樽未来創造高等学校 2年 久保田日音

【講評】かつて自分の乗ったベビーカーを押してくれていた祖母のために、成長した今の自分は、祖母の車イスを押している。祖母からの愛情と祖母への愛情が「ベビーカー」「車イス」というモチーフを用いて巧みに表現されている。

《入選》

小学一〜三年生の部

あさくさのかみなりもんのおくにあるけむりのくもを頭にかける

札幌市立青葉小学校 2年 山岸 悠翔

【講評】「あさくさ」「かみなりもん」と固有名詞を示して具体的に場所をイメージさせている。また、「かみなり」という言葉から「くも」を連想して表現したところにおもしろみがある。

あたらしいともだちできたキャンプじょういっしょに虫とりクワガタゲット

札幌市立大倉山小学校 2年 宮本 直生

【講評】やや日記的ではあるけれども、それによって夏休みの一日を切り取る効果が得られている。新しい友だちとクワガタを得ることのできた喜びを素直に表すことができている。

夏休みぼくの楽しみ朝ねぼうっかかり早起きあーもつたいない

札幌市立琴似小学校 3年 山田 敬介

【講評】早起きするのはいいことのはずなのに「うっかかり」と言ってしまうところがユニークである。実感のこもったことばを結句にもつてくることで全体をまとめる役割を果たしている。

鉄ぼうのうしろまわりはもうできるテストできめてしんきゆうするぞ

札幌市立澄川南小学校 3年 伊藤 聡亮

【講評】一生懸命練習をしてきて、うしろまわりができるようになった喜びと進級への期待をうまく三十一文字にまとめられている。緊張感と自信の入り混じった気持ちのたかぶりも見える。

友だちとみんなで花火火がきえてくらやみになるさびしい気分

札幌市立屯田南小学校 3年 三井 鴻

【講評】花火をみんなで楽しんだときの気持ちとそのあとの寂しさの両方が「くらやみになる」ということばで強くうったえられていて、視覚的にも心情的にもよく対比できている。

きんぎょさんおじいちゃんちのいけのなかすいすいおよいでおどっているね

札幌市立藤の沢小学校 1年 陣内 結子

【講評】きんぎょが「おどっている」と擬人化されることで楽しみに泳ぐさまが目に見えようである。「おじいちゃんちのいけ」という具体性のある場所を示しているところもよい。

何回もれんしゅうしたらできました竹馬のればすずの音ひびく

札幌市立元町小学校 3年 和久井莉子

【講評】上の句の表現はやや散文的だが、下の句の展開と、竹馬というモチーフを主題にしたことに意外性がある。練習の成果が得られた喜びが鈴の音の響きで一層強まるようである。

つかまえたためっちゃうれしいカブト虫にがしてあげるよ長生きしてね

標茶町立沼幌小学校 2年 大島 宏文

【講評】上の句で強く喜びを表現したことにより、下の句のカブトムシを逃がして、その後まで考えるというやさしい気持ちの際立っている。口語的な表現が内容とよく合っている点もよい。

なつのかぜせみがみんないないそらにとんでくむぎわらぼうし

滝川市立滝川第三小学校 1年 高澤創士郎

【講評】作者の視点が、風や木のセミ、空に飛ぶむぎわらぼうしと、全体的に上を向いていて、無駄なことばもなく、夏の陽ざしや空の色が感じられるさわやかな作りになっている。

雪だるま丸をかさねて三だんまで太つちよ細つちよ友だち作ろう

富良野市立布部小学校 2年 金子明日歌

【講評】リズムがよく、太つちよも細つちよもみんな友だちという感じが出ている点がとても良い。「三だんまで」ということばから、雪だるまがどんな姿なのかもはっきり伝わる。

さぼりたいけすのがしごとへりたくないとなんがったままのけしゴムでいたい

富良野市立布部小学校 2年 安口ひびき

【講評】使われるほどに丸くなるけしゴムの気持ちになつてうたつてているが、自分の思いをけしゴムを通して表しているように見える。ユーモアと擬人化が非常に巧みな一首である。

すきな虫みみずとけむしかたつむりちようちよにとんぼつかまえたいな

北海道教育大学附属札幌小学校 2年 石坂 陽絆

【講評】虫への愛情がとてもよく伝わってくる。地を這う「みみず」、木の葉にいる「けむし」「かたつむり」、空を飛ぶ「ちようちよ」「とんぼ」というように、視線が上へと誘導される作りがおもしろい。

おきなわのキラキラしてる海の砂そこまでとう明シユノーケリング

北海道教育大学附属札幌小学校 2年 平間 尊

【講評】シユノーケリングの感動をうたうために海底の砂に注目して、海水全体の透明感を表現している。泳いでいる魚をうたうよりもずっと、海の美しさとその感動を伝えることができています。

小学四〜六年生の部

飛行機は夏の青空ひゅうと飛び親せきいここに会わせてくれた

旭川市立北鎮小学校 4年 松田 新代

【講評】夏休みに飛行機で旅行した時のことを言っているのであらう。「夏の青空ひゅうと飛び」という子どもらしい表現で好感がもてる。下句の「親せきいここに会わせてくれた」に気持ちがよく出ている。

この花火私はここで見上げてる天国からは見おろしている

岩見沢市立幌向小学校 6年 二瓶 優生

【講評】花火を自分は、ここで見上げてるが、天国からは見おろしているという対比がこの作品を特色のあるものになっている。こうした発想が出てくるのも短歌の良さであろう。

あらそいだいそ舟ジャンプいつせいにかえつてきたぞ山積みこんぶ

えりも町立東洋小学校 4年 神田 莉希

【講評】コンブ漁では朝一斉に船を出し、良い漁場を目指すとの事。それを「あらそいだ」と表現したところがこの作品の工夫しているところである。その地域の様子を題材にしているのが良い。

七夕で願いが一つかなうならもどらぬ祖母と天の河で会う

小樽市立奥沢小学校 6年 森田 歩

【講評】七夕で願いがかなうなら亡くなった祖母に天の河で会いたいという。子どもらしいじらしさが伝わってくる。気持ちがストレートに表現されているところが良い。

十五夜だ月をみなながら皿かこみ栗柿ぶどう家族で食べる

共和町立西陵小学校 6年 田村 隼人

【講評】十五夜に、月にお供えした果物「栗」「柿」「ぶどう」を家族で囲みながら食べるという、何と和やかで微笑ましい家族だ。「十五夜だ」と初句切れにしたのも効いている。

夏休み海のキャンプで拾ったよ貝の数だけ海の音

札幌市立幌北小学校 4年 貴多 俊介

【講評】夏休みに海でキャンプをした時の作品であるが、「貝の数だけ海の音」が素晴らしい発想である。こうした発想が生まれるのは日頃から言葉に関心を持っているからこそであろう。

夏休みせんこう花火見つけてる小さな火の玉とび出す火の糸

札幌市立幌北小学校 4年 高野 めい

【講評】この作品は、線香花火をよく観察して「小さな火の玉とび出す火の糸」と、素直に子どもらしく表現しているところが良い。見たままを歌にしたお手本のような作品である。

五分間たたき続けた石の中あつ！二枚貝！化石発見

札幌市立札幌小学校 5年 坂上 悠崇

【講評】この作品は実際に体験したことをもとにし、下の句で感動を率直に表現したところが良い評価となった。「あつ！二枚貝！化石発見」の止め方が効果的である。

幻のにじ色の橋出て来たら行ってみたいな向こうの世界

札幌市立札幌北小学校 6年 森 夏蓮

【講評】虹が出たら「行ってみたいな向こうの世界」と小学生らしい思いが素直に出ていて好感がもてる。虹を「にじ色の橋」と表現したところも良い。

たのしみはペットボトルのラベルとりピリピリ音きもちよし

札幌市立篠路西小学校 6年 櫻庭 匠悟

【講評】この作品の良いところは、ラベルを剥がす音を「ピリピリペリペリ」と特色のある擬声語（オノマトペ）で表現したところである。下の句の「音きもちよし」が生きている。

たのしみは夢へのとびらひきこまれくぎ付けになる本を読む時

札幌市立東園小学校 6年 岡崎 桃香

【講評】本を読むことを「夢へのとびら」に引き込まれるという高学年らしい斬新な言葉で表現しているところが心憎い。「くぎ付けになる本を読む時」に勢いを感じる作品になっている。

まだ暗い電車から見る田んぼ道じいちゃんが待つセミが鳴く駅

札幌市立前田小学校 6年 鈴木咲耶子

【講評】夏休みに家族で祖父を訪ねる時の作品であろう。電車から見た田舎の情景をよく表現している。特に結句の「セミが鳴く駅」が子どもらしい表現で優れている。

ローソクがたん生ケーキにひとつだけまともないでよ10本立てて

札幌市立円山小学校 4年 堀田 和輝

【講評】自分の誕生日のケーキに立てられたローソクが一本だったのである。10歳を祝う誕生日である。まともないで10本のローソクを立ててほしいという実に子どもらしい作品で微笑ましい。

時忘れ読んだ本には味があるあまからしよっぱくときどきながい

札幌市立山の手小学校 6年 林 秀一郎

【講評】この作品の良いところは、読んだ本にはいろいろな味があると捉えたところである。「あまからしよっぱくときどきながい」と一気にたたみかけているところが生きている。

たのしみは一ねんが終わる大晦日の夜。明日から新しい年が始まる。来年は中学生である。「ちよつと大人にちかづける時」とさつとまとめたところがこの作品の良いところである。

苫小牧市立清水小学校 6年 本田美彩希

【講評】一年が終わる大晦日の夜。明日から新しい年が始まる。来年は中学生である。「ちよつと大人にちかづける時」とさつとまとめたところがこの作品の良いところである。

流れ星いそがなくてもいいんだよどこにつれてくそのおねがいを

苫小牧市立豊川小学校 5年 井村 七海

【講評】流れ星にお願いをしたのである。その自分のお願いをどこに連れてゆくのかという発想がおもしろい。「いそがなくてもいいんだよ」という子どもらしい表現がかわいらしい。

停電だおちこむ空に星がありふだん見えないすきとおる風

苫小牧市立豊川小学校 5年 佐藤あいら

【講評】昨年の北海道胆振東部地震のブラックアウトを思い出す。停電の夜に空を見上げると無数の星が煌めき、普段と違う様子を感じた作品。下の句の「ふだん見えないすきとおる風」に雰囲気を感じる。

秋の風短き夏の思い出を乗せて彼方へ吹き去って行く

北海道教育大学附属札幌小学校 4年 田外 絃晟

【講評】秋が来ると、楽しかった夏の思い出を風が彼方へ吹き去っていくという。センチメンタルな雰囲気のある作品である。夏と秋を対比して寂しさを感じさせる。

夏の日風に風の合奏風鈴の音色響くよ広い青空

北海道教育大学附属札幌小学校 4年 山西 応宗

【講評】風鈴の音色を「風の合奏」と捉えたところが素晴らしい。その音色が青い空に響くという作者の大きな性格も感じさせる良い作品となっている。

中学生の部

想像と多彩な絵の具を筆にのせ自由をテーマに描くイラスト

旭川市立緑が丘中学校 2年 米倉 めい

【講評】「想像」と「多彩な絵の具」とを対比してそれを筆にのせて描くという発想が素晴らしい。まさに自由をテーマにしたイラストを描くのにふさわしい詩情のある表現である。

帰り道二文字の言葉言えなくて今日も「またね」遠くなる君

網走市立第三中学校 2年 篠原 菜蓮

【講評】いとおしく思っている君との帰り道、好きと言えないもどかしさを表現している。「好き」と書かずに「二文字の言葉」と表現したところが良い。初々しい恋の歌である。

かぶりつきはじける甘さ夏到来火照ったからだ冷やしたトマト

石狩市立樽川中学校 2年 加藤 藍俐

【講評】歯切れがよくリズムミカルな作品である。トマトが大好きなのであろう。「夏到来」と三句切れにしたことで、下の句の「火照ったからだ冷やしたトマト」が生き生きとして効果的である。

船の上オホーツク海眺めれば胸に聴こえたクジラの唄声

小樽市立朝里中学校 2年 真鍋 孝也

【講評】船の上からオホーツク海を眺めたという、中学生らしいスケールの大きな作品である。下の句の「胸に聴こえたクジラの唄声」という表現にも詩情が感じられる。

いつしかは愛する気持ち冷めていく誰も飲まないスープのように

札幌市立西陵中学校 3年 三浦 佳恋

【講評】「愛する気持ち」がいつか冷めて行くことを「飲まないスープ」が冷めるとの比喩で、やや背伸びをした感じはするが「愛」が冷めることを「スープ」にたとえたところがこの作品の手柄である。

増えていく車のライト六時台ひしひし感じる秋の訪れ

札幌市立真駒内中学校 2年 今渡 愛理

【講評】日暮れが早くなり、ライトをつけた車が増えることで、秋の訪れを感じると言う。中学生らしい作品である。状態をそのまま表現しているが、そこに一抹の寂しさを感じる。

なにとなく見上げた空に飛行機雲ノートに書いた「まっすぐ生きたい」

洞爺湖町立洞爺中学校 2年 岡本 愛

【講評】青い空に真っ直ぐに伸びる飛行機雲に、一途さを感じたのである。自分もあの飛行機雲の様に目標に向かって「まっすぐ生きたい」と「ノートに書いた」ところが好ましい。

そうかいだ風をあじわう自転車に立ち乗りをする夏到来だ

函館市立亀田中学校 2年 藤井さくら

【講評】自転車に立ち乗りをして思いっきり走ったのである。初句の「そうかいだ」が勇ましい。「風をあじわう」がさらに爽快感を感じさせる。

プールまで自転車こいだサンダルで塩素のにおいは夏の思い出

美深町立美深中学校 2年 坂井 凜

【講評】プールの塩素のにおいを題材にした斬新な作品である。「自転車こいだサンダルで」の倒置も効いている。夏にしか味わえないプールの体験を「夏の思い出」として大切に思っているのである。

雨の日も北の大地に鳴る鳴子散る花のごとく軽やかに舞う

富良野市立樹海中学校 2年 高道 妃菜

【講評】「北の大地に鳴る鳴子」でヨサコイソーラン祭りを彷彿とさせる。さらに踊っている様子を「散る花のごとく軽やかに舞う」と詩的に表現したところが工夫を感じる。

雨の日もお気に入りの傘開いたら空模様まで花柄になる

立命館慶祥中学校 2年 山田 舞乃

【講評】女性らしい雰囲気のある作品である。お気に入りの傘を開くと「空模様まで花柄になる」と結び、読む者の心までも明るくしてくれる心地良い作品である。

高校生の部

里帰り祖父母と話す母の背に子供時代の面影を見る

帯広北高等学校 1年 矢野 一真

【講評】夏休みに母親の実家に行ったのであろう。祖父母と話す母親の姿に子供の頃の母が想像されたのである。高校生らしい哀愁を感じる作品である。

お弁当いつも同じ味がする落ち着く時間母の愛情

帯広北高等学校 2年 長岡 海翔

【講評】お昼にお弁当をひらく時が一番落ち着くのであろう。母親の愛情を感じる時間でもある。お母さんの思いが詰まった特別なお弁当である。ほわっとした雰囲気のある作品である。

雨上がり虹の足がすぐ近く行ってみるかいつかんでみるかい

帯広北高等学校 2年 廣瀬 綾菜

【講評】雨上がりに見えた虹がすぐ近くにあるように感じたのである。下の句の「行ってみるかいつかんでみるかい」とかたりかけているようなフレーズが心地良い。

手を出せば一寸ばかりの手が握る笑顔をうみだす小さな命

帯広北高等学校 2年 藤嶋 杏怜

【講評】赤ちゃんを「笑顔をうみだす小さな命」と表現したところが優れている。自分の出した手を小さな手がにぎる感触がよく出ている。

叶わぬと思いながらも書いてみた短冊ひらひら柳にゆれる

帯広北高等学校 3年 高橋 智也

【講評】願いが叶わないと思いながらも短冊に君への恋心を書いたのである。甘酸っぱい恋の歌である。下の句の「短冊ひらひら柳にゆれる」に揺れる心を表現していて雰囲気がある。

らしくあれ「普通」に心囚われてそんなのただの平均値だと

帯広北高等学校 3年 野田 怜遠

【講評】自分らしくあれ、と思いつつも皆と同じ「普通」にも心が囚われる。揺れる心を表現した高校生らしい作品。「そんなのただの平均値だ」と突っぱねたところが生きている。

夏祭り気になるあの子誘うけど既読つかずに時過ぎてゆく

北海道旭川工業高等学校 3年 高尾 治暉

【講評】夏祭りに心を寄せる「あの子」を誘ったが、相手の気持ちがあはつきり読めないもどかしさをうたっている。あろう。この作品も揺れる心を表現しており、悩み多い高校生らしい作品である。

春が来て恋と笑いと喜びと町のあちこちピンクにそまる

北海道小樽高等支援学校 1年 池 小雪

【講評】春が来た喜びを表現している。「恋と笑いと喜び」とリズムカルで軽快なところがこの作品の良さである。下の句の「町のあちこちピンクにそまる」も明るい雰囲気好感がもてる。

炎天の青空の下ひまわりと麦わら帽の君がほほ笑む

北海道小樽未来創造高等学校 1年 久保田 凜

【講評】「ひまわり」と「麦わら帽の君」との対比が効果的である。青空の下で微笑む君がひまわりのように美しく見えたのであろう。明るく爽やかな恋の歌である。

花火散る僕の思いも風となり揺れて揺らいで届かぬ思い

北海道小樽未来創造高等学校 1年 村上 颯涼

【講評】「花火散る」と初句でぶつけるように表現しているところが生きている。恋の苦しさもどかしさを「揺れて揺らいで届かぬ思い」と結んだのも効果的である。

見て見てとはしゃぐ妹自慢気に小さい手の中貝がら一つ

北海道小樽未来創造高等学校 2年 莊司かぶり

【講評】妹のしぐさ的的確に表現されていて好感がもてる。小さい手の中の貝殻一つではあるが妹にとっては大切な宝物なのである。妹に好意をもっている様子が感じられる。

あなたの背追って駆けゆく小樽坂潮風香る故郷の町よ

北海道小樽未来創造高等学校 2年 松村 里玖

【講評】小樽は坂の多い町である。恋人なのであるか。君を追って坂を下ってゆくのであろう。「潮風香る故郷の町よ」と結んだところに郷愁を感じる作品である。

青い夏蝉の鳴き声波の音川のせせらぎ森のざわめき

北海道小樽未来創造高等学校 3年 岩井 陽生

【講評】「青い夏」と初句で言い切り、「蝉の鳴き声波の音」「川のせせらぎ森のざわめき」と聞こえてくる音を対比してリズムカルに表現して爽やかである。

照らされた君の横顔が好きだった忘れられない秋の月夜

北海道釧路湖陵高等学校（定時制）3年 小林 玲菜

【講評】月の光に照らされた「君の横顔」を思い出しているのであろう。「好きだった」と端的に表現したところが良い。高校生らしいしみりとした恋の歌である。